

生命

星空からひろがる想い

地球の周りには幾つもの人工衛星が廻っている。大古から現代まで、人間の宇宙に対しての不思議と興味は、大人から子どもまで尽きることはない。

私の極めて素朴な疑問は、この無限に広い宇宙の星々の中で地球という星にだけ、どうして水や空気が存在し、生命体まで息づいているのかということである。SFの世界では簡単に登場させることのできる生命体は、科学者が血眼ちまなこになって探しても未だに他の天体から「いのち」を見つけないことが出来ないでいる。

「いのち」とは、考えれば考えるほど不思議なものである。いのちの姿はそれぞれの形や衣装を借りて存在するが、その生誕は産声であり、終末は心肺停止でしか証明できない。形や実態を手にとつて見ることは出来ないのである。医師からの生誕や死の宣告は、人間自身の経験を合理的に納得させる言葉でしかないからである。しかし、そこに魂や靈魂という概念がいえんが加わり外延という観念が重なることは単純ではなくなる。それだけに人間の「生死」は厳粛で、「生」は神が与え給うたもので、「死」は蒙昧もうまいで他のものには変えられない尊厳のあるものだということになる。

私が子どもの頃、祖母や母親に「戦死した兄の住むところは、空の果てにあり、そこではどんな人でもお星さまになって暮らしている」と教えられたものである。私は「人は死ぬと大空で日本の兵隊さんもアメリカの兵隊さんも一緒になって暮らすんだね」と答えた記憶がある。他愛無い会話であったが、今にして思えば人間の「いのち」は国籍で決まるのでもなく、勿論、生い立ちにあるのでもない。い。ましてや、イデオロギーや体制の違いにあるものでもない。生きものである限りいのちは常に生死と隣り合わせにあり、人々はそれを眼前に突きつけられたとき、初めて生死の重さを知ることになる。従って、この時の私の解答は兄の戦死が実感できず、ジープからチュウインガムを投げ与える米兵も同じ人間に見えたのだ。

「星の数ほど・・・」という言葉があるが、宇宙全体の中に星はどれくらい在るものなのであろうか。命は人間だけに与えられたものではない。星が命の果てだとすれば、常に星は誕生し続けなければならない。ところが天文学者に云わせると星は一方では消滅していくという。これは生物の生滅という点では合理として合致するが、消えるという一点では反論が予想される。星にはそれほど魅惑的で、ただ闇夜に浮かんでいるだけで、すでに絶大な説得力がある。

星の記憶で忘れられないのは、新潟県と福島県の境にある奥只見湖で見た星空である。ここで体験した震えるような感動は眼まなこの底でも風化することはない。新緑に洗われた透明な朔月さくげつの闇は、この世のあらゆるものから色彩を奪い、漆黒を背景にして永遠の美を天の川として静かに流して見せたのである。色も音も匂いも息吹きさえもない不思議な天空には、無限数の星が輝いていた。空にはこんなにも星があつたのだ。人口的な灯りの全く無い空にはこんなにも沢山の星があつたのだ。改めて見上げた夜空には、針の先で点を打つ隙が無いほどに、無数の星があつたのである。

「杞憂きゆう」は天が落ちることを心配する話であるが、私にはこれが天あに開いた孔あなのように見えるのである。大昔に巨大な隕石が地球を壊滅させたという話はすでに定説になっているが、愚かにも人間は自らの浅はかな知恵で、この地球を十回以上も壊滅させる核兵器をすでに手にしてしまった。不慮や手違いで地球が消えた時、そこにはどんな孔が開くのであろうか。かくて、天界から見えるはずの青く美しい地球はすでに無く、無機物の煙のようになっていたとしたらこの上なく悲しい。さらに、地球上の生きとし生けるものが一挙に天界に昇ったとしたら仮設の住居などでは到底追いつくまい。

奥只見湖の上に広がる見事な夜空は、荒唐無稽な連想を次々と発想させる。この夜空の不思議が奇跡に近いものであったことは、その後、何度足を運んでもこれほどのパノラマを観ることはなかったことによって知らされた。奥只見湖は昔も今も変わらずに在るのだが、千載一遇は、人とは限らず「景」にもあることを教えられた。

あの夜、満空の星々に魅せられ、「いのち」という掴み処のない落とし穴に引き込まれたのは、数ヶ月前、若くしてこの世を去った親友の死がもたらした「俺の分まで生きよ！」というメッセージだったような気がしてならない。真夜中に細い湖岸道路を目的も無く三分も走り続けて、偶然出合った闇の中の星々、全くひと気のない湖畔に開けた山道は、怖さなどではなく神秘的でさえあった。私は長い間この静寂と驚くほどの星の間に、ただ、ボンヤリと佇んでいるばかりであった。

現実の生活は、この仙人境のような環境に長くは置いてくれない。心は浮遊し、随神の意思が長く居るべきでないと示唆しているに違いないと直感する。また慌しい日常が始まったが、この忙しきがある夜の貴重さを一層印象づけてくれるに違いない。街中から夜空を見上げ、星の数を極端に減らしてしまった煌々たる光の中で、天を

仰ぎ、できるだけ俗界から遠ざかり、一瞬の長い「いのち」を生き
たいと思うこの頃である。